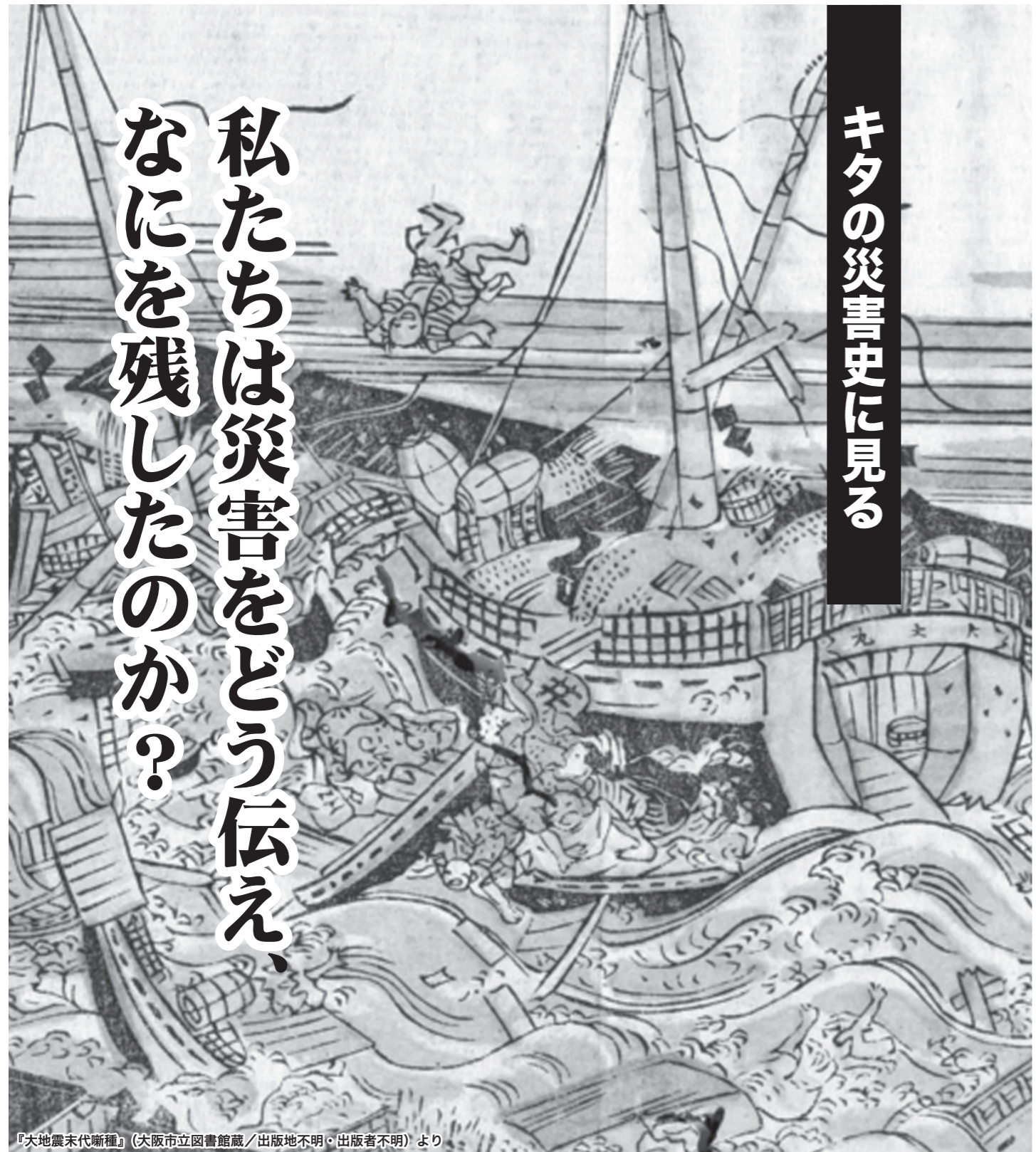


キタを愛する人たちのための、キタを再発見するマガジン。ネットに載らない情報テコ盛り。

つひまぶ 11月号

つながるひとまちぶんか

北区魅力発信フリーペーパー「つひまぶ」vol.9 2016年11月18日発行(毎年3・7・11月発行予定) 編集・発行:つひまぶ実行委員会/大阪市北区役所+北区のおもろ通信団(浅香保ルイス龍太・棚橋真理・平井裕三・松岡慧祐・山田寿也・依藤智子)+大阪市職員ボランティア+協力:奈良県立大学地域創造学部 連絡先:大阪市北区役所(大阪市北区扇町2-1-27) 【tel】06-6313-9743 【fax】06-6362-3821 【mail】tsuhimabu@gmail.com 【blog】http://tsuhimabu.blogspot.jp(誌面に載せられない情報はブログでね♡) 定価:0円 主な配布場所:大阪市北区役所・北区民センター・大淀コミュニティセンターほか多数(配布場所はブログにて随時お知らせします) ※当雑誌の内容、テキスト、画像、イラスト等の無断転載・無断使用を禁止します。



キタの災害史に見る

私たちが災害をどう伝え、
なにを残したのか?

『大地震未代断種』(大阪市立図書館蔵/出版地不明・出版者不明)より

北区災害年表

- 416年(元禄5年) 河内・大和地域で日本で最初に記録された(日本書紀)地震発生
- 1605(慶長9年) 慶長地震発生
- 1707(宝永4年) 宝永地震発生(震度7)
- 1854(嘉永7年) 安政南海地震発生(震度6弱)
安政東海・東南海地震の約32時間後に安政南海地震発生
- 1885(明治18年) 淀川大洪水 左岸堤防決壊(死者293人)
- 1889(明治22年) 淀川氾濫
- 1896(明治29年) 淀川大洪水
明治三陸地震津波(M8.5)
- 1909(明治42年) キタの大火(焼失面積1,220ha、民家11,365戸など焼失)
曾根崎川(蜷川)が被災地整理のために埋め立てられる。
- 1923(大正12年) 関東大震災(M7.9)
- 1925(大正14年) 北但馬地震(M6.8)
- 1927(昭和2年) 北丹後地震(M7.3)
- 1933(昭和8年) 昭和三陸地震(M8.1)
- 1934(昭和9年) 室戸台風襲来(死者1,812人) 豊崎東小学校校舎倒壊(児童19人死亡)
- 1938(昭和13年) 阪神大水害
- 1944(昭和19年) 東南海地震(M7.9)
- 1945(昭和20年) 大阪大空襲
- 1946(昭和21年) 昭和南海地震(M8.0)
- 1948(昭和23年) 福井地震(M7.1) 震度7が設定される
- 1950(昭和25年) ジェーン台風襲来(床上浸水125戸、床下浸水458戸)
- 1959(昭和34年) 伊勢湾台風襲来
堂島川・土佐堀川など120kmの防潮堤完成
- 1960(昭和35年) チリ地震(M9.5) 翌日三陸海岸に最大6.1mの津波来襲
- 1961(昭和36年) 第二室戸台風襲来(床上浸水1,367戸、床下浸水1,625戸)
- 1962(昭和37年) 北区小松原町千成パチンコ店火災(焼損面積9,145㎡)
- 1970(昭和45年) 天六ガス爆発事故発生(死者79人)
- 1983(昭和58年) 日本海中部地震(M7.7)
- 1995(平成7年) 阪神・淡路大震災(M7.3)
地下鉄サリン事件
- 2004(平成16年) 新潟県中越地震(M6.8)
- 2005(平成17年) 北区西天満事務所火災(負傷者26名)
- 2011(平成23年) 東日本大震災(M9.0)
紀伊半島豪雨災害(台風12号)
- 2013(平成25年) 北区が津波浸水区域に入ることが判明
東日本大震災を受けて、災害対策基本法改正
内閣府、南海トラフ被害想定を公表
台風18号に初の特別警報発令
- 2016(平成28年) 熊本地震

火之用心 大阪今昔三度の大火(文久3年発行・大阪城天守閣蔵)



室戸台風



天六ガス爆発



【参考文献】
 北区史 北区制100周年記念事業実行委員会(昭和55年4月1日)
 大淀区史 大淀区史編集委員会(昭和63年11月16日)
 大阪の災害-復興と防災のあゆみ- 大阪市公文書館 平成26年度常設展示資料
 河籍簿 大阪市建設局(平成8年3月)
 奈良の災害史展(平成28年9月)

【背景の図版】『大地震未代断種』(大阪市立図書館蔵)

編集後記

はじめまして!北区中津に住む平井裕三と申します。Webサイト「梅田の北っかわ!」(<http://www.kita-umeda.com/>)で北区周辺の情報を発信しています。このたび、ご縁がありまして「つひまぶ」の編集に参加させていただくことになりました。とにかくいっちょつまみ性格で、まちづくり、福祉、防災、ICT、鉄道など、いろんなジャンルの集まりに顔を出しています。今回は「災害史号」。災害時は平時よりもみんなで助け合い、励まし合わねばなりません。でもそれは普段からお付き合いがあってこそだと思います。そんな想いもあり、地域の情報発信やイベントを企画したりして人と人がつながるきっかけづくりをしています。興味があったらぜひお声をかけてください。みんなでつながるひとまちぶんかの渦を起こしませんか。(平井裕三)



「つひまぶ」
ブログ
毎週月曜
更新
<http://tsuhimabu.blogspot.jp>

「つひまぶ」では、編集メンバーを随時募集しています。興味がある方は、Facebookにてご連絡いただくか、大阪市北区役所地域課区民協働担当 (tel. 06-6313-9743) までご連絡ください。

新たちは災害をどう伝え、なにを残したのか？

表紙をご覧ください。嘉永7年11月5日（1854年12月24日）に大阪を襲った大津波の様子を描いたものです。人がトランポリンで跳ねたように飛び、船が破壊され浮かぶものみなまとめて波がみ込んでいく様子が描かれています。

江戸時代後期の嘉永7年11月4日（1854年12月23日）、静岡県から九州にまで及ぶ南海トラフを震源とする東海・東南海地震と南海地震が1日ずれで発生。地震発生から32時間後、大阪に津波が襲来します。この地震によって元号は「嘉永」から「安政」に変更され、今では両地震はまとめて「安政大地震」と総称されています。このときの様子が『嘉永七年大地震大津波』として記録され、今も残されています。表紙の絵は、そのうちのひとつです。

嘉永7年（1854年）11月4日、南海トラフ巨大地震「安政大地震」発生

そのとき、かわら版はなにを伝え、なにを残したのか？

企画・構成・文・柳橋真理

この絵のほかにも、安政大地震の様子を伝えるものは数多く残されており、かわら版もまた、数多く残されています。

かわら版は一般的に一枚の紙でできており、大見出しがあり、テキストだけのもの、地図や絵が載っているものなど様式はさまざま。欄外に「嘉永七年寅霜月四日辰上刻より凡半時計り之間」等、出来事が起こった年月日が記載されているものもあります。かわら版は何種類も逐次発行されるのですが、順を追って見てみると、興味深いことがわかってきます。

まずは、地震発生直後に発行されたかわら版『大地震につき大破略記』（図①・大阪城天守閣蔵）から。見ると、素っ気ないものです。一見、なにかのリストにしか見えませんが、

「一、天満天神境内井戸家形くずれ。同所土蔵くずれ」

「二、中之島延岡御屋鋪鎮守八幡宮絵馬堂波打来り、沖の大船不残矢を飛す如く、其勢にて川々の橋打流し。浜手の家は無別条地しん故に船をかりて逃居る人も多く、然るに其人々皆々水死と成、大船は船頭・加子死こと其数不知。大船は二千石より千石以上の船不残、小舟は大船の下敷となり、不残大荒なり」とあり、箇条書きだったヘッドラインはひとかたまりのテキストに変化し、現場の被災者にインタビューした情報が挿入され、さながらルポルターージュのように情景が描写され、客観情報をベースに主観情報を加えることで読み手が情景を想像しやすいよう切迫感を出そうとしていることが、ここからは読み取れます。

また、先の『大阪大地震津波之図』にはなかった、船で逃げようとした人がたくさんいて、その人たちがみんな亡くなったことも書かれています。つまり、目で見たりリアルタイムの情報だけでなく、そこに至るまでのプロセスの聞き取りがなされている、ということなのです。

『嘉永七年寅十一月大坂大地震大津波』（大阪城天守閣蔵）では、なぜ多くの人が船で逃げようとしたのか詳しく書かれています。

「地しんにおそれ、町々の老若男女貴賤の別なくうろたえさわざ、思い思いの船に乗るも、ゆりつづされるうれひなしと悦ぶかきも、あらかんじや一時に津波押かかり、舟もるともに水底へひつくりかへりし、啼き声は大坂中へひびきわたり」ます。地震で足元が揺れる恐怖と建物が倒壊する危険から船に乗り安心したものの、津波が押し寄せて船もるとも転覆したのです。

この『嘉永七年寅十一月大坂大地震大津波』は『嘉永七年寅十一月諸国大地震大津波ならびに出火』（図⑤・大阪城天守閣蔵）と合わせて一枚となっています。右半分が大阪の、左半分が全国の被災情報。詳細なルポルターージュがあり、具体的な死傷者数

くずれ」

「一、天満梅がへ寺町行あたり正客寺境内金毘羅社絵馬堂くずれ」

「二、堂しま桜橋南詰西江入家五、六軒くずれ」

などなど。全部で25ヶ所の被災状況がピンポイントで箇条書きされていて、まるでツイッターのタイムラインのようです。ほとんどが建物の破損情報。速報集ですね。この時点では、災害の性質や全体像はまだ見えてきません。

『本しらべ大坂大地震大破略記』（図②・大阪市立図書館蔵）は、その続報です。前出の『大地震につき大破略記』の箇条書きをベースに加筆されており、ピンポイント情報が次々と増えていきます。スペースに収

めるために、文字はどんどん小さくなり、デザインナー泣かせなのが伝わってきます（笑）。ただ、重要な追加情報が大きな字で書かれるなど、デザイン的な処理がなされはじめているのは興味深い点です。挿絵もあります。

また、このかわら版では、最終段に、「同五日くれ六半より安治川口より大つなみ。凡千石舟より小舟数しれずつづれ、井死人かずしれず」とあり、住吉橋、幸橋、汐見橋、日吉橋、黒金橋、金谷橋、四天王寺の伽藍、生魂玉神社の神楽所、下寺町の両国寺本堂などがつぶれたと続きます。どうやら、地震により大津波が発生し、水害による甚大な被害が発生していることが急ぎよ盛り込まれたようで、締切間際に重大な情報が飛び込んできたような印象を受けます。

また、このかわら版では、「前代未聞」とあるところ、このかわら版では「宝永年中大阪大地震大津波次第」という小見出しとともに、過去の宝永大地震と津波の概要が掲載されています。

宝永大地震とは、江戸時代の宝永4年10月4日（1707年10月28日）に発生した、記録に残る日本最大級の地震です。この地震もまた、南海トラフのほぼ全域にわたってプレート間の断層破壊が発生したと推定されるものです。

この宝永大地震から50年忌にあたる宝暦6年（1756年）に梅田墓にて万燈会供養や諸宗大法事修行がおこなわれたこと、宝永大地震から嘉永7年の安政大地震まで数えて148年になることなどが書かれています。

ここに至って、過去の災害史が参照されるようになるのです。

このように、安政大地震のときに発行されたかわら版を順を追って見ていくと、地震発生当初は箇条書きによるヘッドラインのみで、やがてそれらはまとめられていきまの聞き取りがおこなわれ、ルポルターージュの体裁をとるようになります。同時に、全国規模の情報が集約され、災害の全体像が把握されるようになり、最後には、過去の災害と関連付けられ、一連の出来事としてまとめられ、保存版がつくられる、という流れが見えてきます。

火事におけるかわら版も同様です。火事が起こるたびに発行されるかわら版とは別に、『火之用心』（大阪城天守閣蔵）と題した、大阪今昔三度の大火をまとめたかわら版が残されています。

その後に発行されたかわら版『大阪大地震津波之図』（図③・大阪市立図書館蔵）では、すでに地震から津波の被害情報に特化したものになっています。

中央部分にある、いくつも船が転覆している川は道頓堀で、その南側と木津川より西はほぼ水没しています。

地図に添えられたテキストには、「怪我人・死人夥数」とあり、沈んだ船は数知れず、水没した地域は「白海の如く」で、こんなことは「前代未聞」だと書かれています。

このかわら版を見た人は、マジか！と思うたに違いありません。大津波による被害が想像を超えてはるかに甚大で、水害こそがこの地震による主な被害であることがわかってきました。

さらに『諸国大地震大津波細見晰の種』（図④・大阪城天守閣蔵）では、大阪の被災情報のみならず、大阪以外の「諸国」の被災情報が掲載されています。

大阪では地震による出火はほとんどありませんでしたが、東海道の宿場町や江戸では出火の被害もありました。そのため、出火の項目が設けられています。

東海道大地震出火、江戸大地震出火、京都大地震など、大阪以外の情報は飛脚を通じて調べられ、「此書一枚にて国中ごとく相分り重宝の書なり」とあります。

このことから、この地震が関東から東海道関西にまでまたがる広範囲に被害をもたらしている大地震であることが、人々に知られるようになっていきます。

さらに、テキストには変化が見られます。大津波による被害が深刻だった川口（西区）を例にとると、「嘉永七寅十一月五日申ノ刻、西の方より雷のごとくになり、ふしんに思ひしが、其夜五ツ時沖手より大津

過去の火事の被災範囲の地図と概要が書かれ、心得が記されており、まさに保存版のハザードマップのようになっていきます。

速報集から保存版まで、たくさんのかわら版を見ていると、インターネットを見ているような気持ちになります。情報の信憑性が疑問視されるものが混じっているところも、時間が経つとおまとめサイトができることも、インターネットとよく似ています。今も昔も、大きな出来事を記録し、残そうとする気持ちはおなじようです。

宝永大地震の50回忌が梅田墓でおこなわれたことから、50年経ったあたりまでは、人々のあいだで宝永大地震の記憶が残っていたことがわかります。また、安政大地震発生の翌年、安政2年（1855年）には、『被害者追悼供養の碑』が建てられ、その碑文は『大地震両川口津波記』（大阪市立図書館蔵）として、かわら版にもなりました。

宝永大地震の津波のときにも船で逃げようとした人々がいて、波にのまれてたくさんの人々が亡くなったこと、それを伝え聞くことがほとんどなかったため、今回の大津波でもおなじように船で逃げようとして多くの人々が亡くなったことが記されると同時に、大きな地震が来ても船で逃げようとしてはいけない、と心得が記されています。

安政大地震が発生したとき、約150年前の宝永大地震のことは人々の記憶からは忘れられていました。それは「前代未聞」というかわら版の記載から明らかです。しかし、記録は残っていました。大地震と大津波を経験して、人々は忘れていた宝永大地震の記録を掘り起こしたのでした。記録を残すだけでも、まとめるだけでも足りません。記憶をつないでいかななくては、その思いを引き継いで、今号のつひまぶはキタの災害を特集します。（終）

「P2より9左頁」【震災調査広報チラシ】（大阪歴史博物館蔵）から



『大坂梅田墓萬燈供養図』（大阪城天守閣蔵）



図①：『大地震につき大破略記』（大阪城天守閣蔵）大地震の様子がピンポイントで箇条書きにされている、いわば速報集。ツイッターのタイムラインのよう。情報はアトランダムに並び、整理されていない。



図②：『本しらべ大坂大地震大破略記』（大阪市立図書館蔵）箇条書き情報が追加され、そのぶん、文字が小さくなる。重要な最新情報は大きな文字で記され、情報が整理されはじめています。最後に津波情報が急ぎよ追加されたような印象。



図③：『大阪大地震津波之図』（大阪市立図書館蔵）大津波による被災地域が地図で表され、水害による被害が甚大であることがわかり、安政大地震による主な被害は水害であることがわかるようになる。



図④：『諸国大地震大津波細見晰の種』（大阪城天守閣蔵）大阪以外の地域の被災情報が挿絵付きで記載されており、全国規模の大震災であったことがわかるようになる。



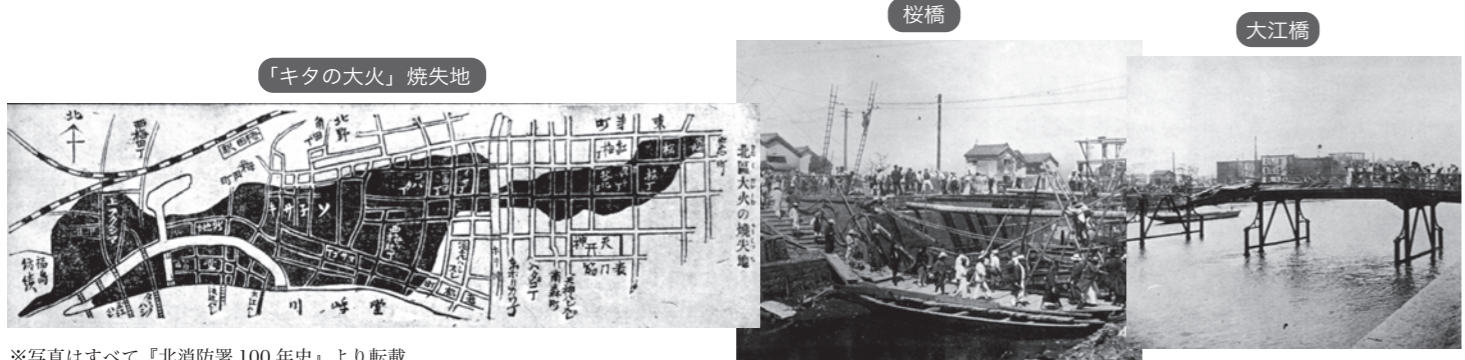
図⑤：『大坂大地震大津波、諸国大地震大津波ならびに出火』（大阪城天守閣蔵）右が大阪の被災情報で左が全国の被災情報。情報がまとめられ、過去の震災史が掲載され、教訓が示されたパンフレットのような保存版。

幸いにして、第二室戸台風以来、大阪には大きな被害をもたらすような台風は上陸していませんが、そのことで、過去の記憶を呼び起こす力が弱まっているようにも思えてな

きでも、淀川河口域の堤防が決壊することはありませんでした。このように、上流域からの洪水に対する治水安全度が飛躍的に向上した淀川河口部周辺ですが、水害のリスクがゼロになっただけではありません。近年頻繁に発生している集中豪雨による局地的な浸水被害、台風による高潮大地震による津波などのリスクもあります。高潮とは、台風などの低気圧が接近する際に気圧の低下により海面が吸い上げられたり、また沿岸部からの強い風により海水が湾岸部へ吹き寄せられることで、通常より海面が高くなる現象です。その結果、海水が防潮堤などを乗り越え浸水被害が発生します。大阪平野には海抜0メートル地帯が数多くあり、一度洪水が襲ってくると容易に排水ができなため基大な被害をもたらします。



防潮扉を閉鎖するのは水防団 大阪市には 354 基の防潮扉がある ダイナキューブ 津波・高潮ステーション



「キタの大火」焼失地 桜橋 大江橋

もちろん出るし、さながら地獄絵図のようだったとか。救援の船が次々に岸に横付けして、被災者の輸送にあたりました。避難場所は中之島公会堂。西堀川方面の火勢は、東梅ヶ枝町、西梅ヶ枝町から北野に達し、第2防火線と頼んだ梅田新道も難なく突破。午後8時30分、ついにお初天神が焼け落ち、その直後、蛸橋も焼け落ちました。猛火はそれからもまったく収まらず、北新地から堂島米穀取引所、桜橋の劇場を焼き、曾根崎警察署と静観楼を半焼し、曾根崎川の橋などをことごとく焼き尽くします。曾根崎新地の人々は、船に家具を積んで火の粉が舞う曾根崎川を西へ逃げたのでした。このとき、風速は毎秒17〜19メートルを記録し、火炎がうなりをあげて空に舞う状態だったそうです。第3防火線であった出入橋付近一帯の空き地である堂島割堀も火勢を阻むには至らず、堂島浜通2丁目にあった市立高等商業高校、大阪府立測候所知事官舎を総なめにし、火は福島区の一部にまで達したのです。折りからの強風が衰えたことと消防の活躍により、福島中の天神石垣から日本紡績会社の高塚に遮られて、ようやく鎮火した

には、もうひとつは南に進み、天満宮こそ消防手の必死の活動により難を逃れたものの、天神橋筋2丁目から南森町を一掃し、午前11時30分には天満堀川の岸に達します。第1防火線と決めた場所、天満堀川。しかし、その両岸にある竹屋が川中に差し出していた竹竿を伝って、あつという間に火が西岸に移ります。写真を見ると、焼け残った家はなぜ焼け残ったのか？と不思議に思えるほどの惨事です。木造だった大江橋も焼け落ちました。天満堀川を越えると、そこは西天満。官公署や神社がひしめく場所。西天満小学校が災禍に遭い、老松座、老松神社は全焼、当時若松町にあった北区役所、さらには北警察署大阪控訴院、地方裁判所までもが火に包まれます。大阪控訴院前の堂島浜一帯には、逃げ場を失った群衆がどっと詰めかけて、持ち出された家財道具なども散乱する大混雑となりました。しかし、その間も風に煽られた火炎が背後から迫ってきます。焼死者は

高潮被害を学び 津波への恐怖と向き合う

水害に見舞われながらも川と共存してきた北区。いま一度、津波や水害に向き合ってみませんか？

過去に大阪を襲った台風のなかで、高潮被害をもたらした代表的な台風は、3つあります。1934年（昭和9年）の室戸台風、1950年（昭和25年）



鶴満寺 風害慰霊塔 室戸台風時の中之島公園では大川があふれ、1.5メートル浸水した 室戸台風で大阪駅前に水があふれ、交通に支障をきたした



写真で振り返る「キタの大火」



明治42年、空心町（現在の扇町総合高校付近）より火災発生。24時間で北区の大半を焼き尽くす。そして、北消防署の開庁へ。

今から約100年前、北区の大半を焼き尽くした「キタの大火」と呼ばれる大火事がありました。そのときの様子を伝える写真が『北消防署100年史』に掲載されており、折に触れて各所で写真のパネル展示などがおこなわれています。どんな火事だったのか、おさらいしましょう。

1909年（明治42年）7月31日午前4時20分、現在の扇町総合高校付近のメリヤス製造販売所のランプから出火します。出火と同時に市内はもろろん、隣接町村から警察消防組が来援し消火に努めるも、メリヤスは爆弾の原料にすらなるほど燃えやすい材料でもあるので、一気に燃えひろがります。付近の松ヶ枝小学校を類焼させて火勢を強め、たちまちのうちに松ヶ枝町、壺屋町を襲い、河内町、此花町が火の海に。真夏の炎天続きでよく乾燥していたことと強い東北の風に煽られて、この火が西へ西へと燃えひろがっていったのです。火の手は南北に分かれ、ひとつは此花町から北西

に、もうひとつは南に進み、天満宮こそ消防手の必死の活動により難を逃れたものの、天神橋筋2丁目から南森町を一掃し、午前11時30分には天満堀川の岸に達します。第1防火線と決めた場所、天満堀川。しかし、その両岸にある竹屋が川中に差し出していた竹竿を伝って、あつという間に火が西岸に移ります。写真を見ると、焼け残った家はなぜ焼け残ったのか？と不思議に思えるほどの惨事です。木造だった大江橋も焼け落ちました。天満堀川を越えると、そこは西天満。官公署や神社がひしめく場所。西天満小学校が災禍に遭い、老松座、老松神社は全焼、当時若松町にあった北区役所、さらには北警察署大阪控訴院、地方裁判所までもが火に包まれます。大阪控訴院前の堂島浜一帯には、逃げ場を失った群衆がどっと詰めかけて、持ち出された家財道具なども散乱する大混雑となりました。しかし、その間も風に煽られた火炎が背後から迫ってきます。焼死者は



グーグルマップに見る、 インターネットは どんな役割を 果たしたか？

人間は昔から、口承やかわら版などを通じて、災害に関する情報を伝えてきたわけですが、その技術は、今やテレビや新聞等のマスメディアを越えて、インターネットへと移行しつつあります。

その力が知られるようになったきっかけは、いまだ記憶に新しい東日本大震災。電話がつかえず、ツイッター上に被災地の状況や人の安否を伝えるつぶやきが大量に投稿され、リアルタイムに拡散されたのです。しかし、そこでは、玉石混交の情報が氾濫。その一方で、いち早く情報の「整理」に取り組んだのが、かねてから世界中の情報を整理するプラットフォームづくりを目標としてきたグーグル社でした。

グーグルは、地震発生からわずか2時間足らずで、安否情報の検索サービス「パーソンファインダー」を開始。避難所から名簿の写真を取り寄せ、スタッフの手で一人一人の名前を入力していきましました。しかし、スタッフだけでは手が足りなかつたため、ネットユーザーへボランティアを募り、延べ約5,000人が入力作業に参加。行政やマスメディアも情報提供に協力し、1ヶ月余りで約67万件のデータが登録されたと言われています。さらにグーグルは、被災地の衛星写真や避難所情報マップのほか、本田技術工業から提供されたデータをもとに、過去4時間のうち車

両の通行実績のあった道路を表示する「自動車通行実績情報マップ」を、グーグルマップによって公開しました。

こうしてグーグルは、行政、マスメディア、企業、ユーザーと連携することで、まさに災害情報のプラットフォームとして機能したのです。そして、そのための手段として活用されたのが、グーグルマップ。地図は、空間上に散らばった情報を整理し、一覧化するのに最適な道具です。とりわけグーグルマップでは、さまざまな情報を一枚の地図にごちゃ混ぜにするのではなく、いくつものレイヤー(層)に分けて整理したうえで表示することができます。その意味で、グーグルマップ自体もまた災害情報のプラットフォームとして有用であることが、震災をきっかけに証明されたと言えるでしょう。

そして、今年4月に発生した熊本地震でもグーグルは「パーソンファインダー」や「自動車通行実績情報マップ」をスピードに立ち上げるとともに、地震発生から3日後には、「熊本地震リソースマップ」を公開しました。もともとは若者によるボランティア団体が、行政やマスメディアから集めた被災地の情報(避難所、スーパー営業情報、炊き出し&支援助物資集積地点、給水所など)を、自分で地図を編集できるグーグルマップのマイマップ機能を使って自主的にマッピング。それが、グーグル公式の災害情報マップに採用されたのです。

このようにグーグルが災害情報のプラットフォームになることは、必ずしも災害対応をグーグルに依存することを意味しているわけではありません。以上の事例からもわかるように、災害時の情報はグーグルのみの力ではなく、他の組織やユーザーとの連携によって蓄積されていきます。グーグルはそのための土台を用意することで、ネットワークをつく

り、情報を一ヶ所にまとめる役割を果たしているわけです。

現在、グーグルの災害情報は、「クライシスレスポンス」と呼ばれるサービスに統合され、そのなかで、災害時にかぎらず、防災マップや避難所情報マップ、気象情報マップなどを常時公開しています。防災マップに関しては現時点では東京都のものにしか対応していませんが、これまで各自自治体で独自に作成されてきた防災マップも、グーグルのプラットフォームに集約される方向に向かっていきます。

その一方で、グーグルは東日本大震災の被災地の記憶をアーカイブする「未来へのキオク」プロジェクトにおいて、震災前後のストリートビュー(現地のパノラマ写真)やユーザーから投稿された写真・動画を公開。グーグルの技術は、実践的な災害対応だけでなく、こうして震災前の記憶をよみがえらせ、また後世に震災の記録を継承するためにも活用されているのです。

このようにインターネットにおける災害情報の提供は、オープンな連携に長けたグーグルによってリードされているわけですが、グーグル以外でもさまざまな取り組みがおこなわれています。全国の過去の自然災害を地図上で検索できる「災害年表マップ」(防災科学技術研究所)もそのひとつ。なんと西暦416年から2013年までの約5万件のデータが収められています。

ITの導入によって災害情報が充実していくなか、ITを使いこなせるかどうか、災害時の情報格差を生み出すことになりえます。いざというときのために、まずはこのような「災害史のデータベース」にアクセスし、自分の住む地域で過去にどんな自然災害があったかを知ることからはじめてみてはいかがでしょうか。(松岡慧祐)

網敷天神社末社 歯神社の御由緒から

梅田水没を防いだと言われる歯神社は、 水防碑の一種



エストの東側に、小さな祠があります。網敷天神社の末社で、「はがみさん」と親しみを込めて呼ばれる「歯神社」です。今から数百年前、梅田一帯は大洪水に見舞われ、あわや水没するかというとき、地元の人がお祀りしていたお稲荷さんの御神体である巨石が水を「歯止め」し、梅田の水没を防いだと言われています。その巨石が、本殿地中深くに鎮座しています。以来、歯止めの神さまとして慕われ、転じて、歯痛にもご利益があるとも言われています。

梅田は元来「埋田」と書かれた低湿地帯。泥土を埋め立てて田畑地を拓いた場所、たびたび水害に見舞われてきました。そんな歴史から、「歯神社」を水防碑の一種として見ることもできるかもしれませぬ。(ルイス)

上町断層が動いた跡？ 謎の段差をめぐる 噂の真相

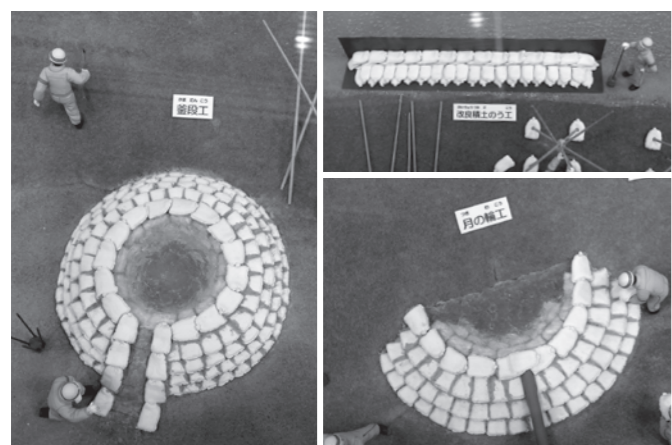
本庄東一丁目界隈の代々の地主さん 木下正二郎さんに聞く

本庄東一丁目の路地の入り組んだところに、謎の段差があります。地図を見ると、上町断層が通っているあたり。上町断層が動いた跡ではないかと、本庄界隈では噂されているとか。この噂について、この地の代々の地主である木下正二郎さんにお話をうかがいました。さて、その真相はいかに「中世の時代、このあたりは海で、段差がある天六あたりは砂州でした。明治初期、本庄村(今の本庄)などの村落はあったものの、あたり一面は田畑でした。都市部として宅地開発で埋め立てがおこなわれましたが、あの段差はそのときの名残でしょうね。たまたま上町断層の上あたりにあるので、まことしやかにささやかれたのだらうと思います」とのこと。どうやら、ゆるやかな傾斜部にあった田畑を埋め立てたときにできた段差のようです。しかし、そんな迷信がささやかれる裏には、ハザードマップを詳細につくるとするなどと、この地域の防災意識が高いことが挙げられるのです。(ルイス)



水害時に 外を歩くときは、 「転ばぬ先の杖」を 持つておくことや。 でない、と、 穴に落ちて死ぬ。

元・淀川左岸水防事務組合収入役
全国防災協会 水防技術専門家
松永正光さんに聞く



「水防には、上り坂や下り坂以外に、まさか」という坂がある。「まさか」を覚えておかなあかん」と語る松永さん。松永さんは、淀川左岸水防事務組合に長年勤めてきた水防の専門家です。

組合では、淀川の水害から北区を守るため、水防工法の訓練を毎年おこなっています。堤防の上に土のうを積み上げる「積土のう工法」。堤防の傾斜地(のり面)から水が漏れだしたときには「月の輪工法」。土のうを半円形に積み上げて水を貯め、河川との水位差を縮めて水圧を弱め、水漏れの拡大を防ぐ工法です。平地から水が吹きだしたときには、土のうを円形に積み上げて水漏れの拡大を防ぐ「金段工法」…。土のうを積むのにも、漏水場所によってさまざまな工法があり、覚えておくに役立ちます。

また、松永さんが子どもだった頃の出来事も話してくれました。「台風で大雨のときに堤防を見に行ったら、堤防の上の方で蛇が何10匹も集まって塊になってた。それをおばあちゃんに伝えたら、いつでも逃げられる準備をしろよ、と言われた。それから1時間後に、上流の堤防が決壊や。水防工法と違って科学的な根拠はありません。しかし、大雨で堤防が決壊するとき、前兆として動物が異常行動をとる例は、ときどき耳にします。

これだけは覚えておいてほしい、と松永さんが話してくれたのは、こんな話です。「水害時に外を歩くと、穴に落ちて死ぬ。おとこや、でないと、穴に落ちて死ぬ。大雨で下水に大量の水が流れると、水圧でマンホールの蓋が吹き飛ぶことがあります。すると深さ10メートル以上の落とし穴ができます。しかし、冠水した道路では穴の場所がわかりません。そんなときは、杖で足を確かしながら歩き、落下を防げ、と。文字通り、「まさか」に備える「転ばぬ先の杖」ですね。(Taeyang)

震災を機に、人に優しくするスイッチが入ります。

このスイッチが固くならないよう、刺激を与えるのが私の役目。

元 関西大学リサーチアトリエ・ポストドクトラルフェロー
熊本大学地域創生推進室・特任助教
安部 美和

天神橋筋商店街の関西大学リサーチアトリエを巣立って2年、新天地・熊本に慣れた頃、思いもしないことが起こりました。2016年(平成28年)4月14日と16日に発生した熊本地震。世のなかでは前震と本震と呼ばれているようですが、私のなかでは「発目」と「二発目」といった感じです。復興政策を研究する者として、防災にはずいぶん関わってきたつもりでしたが、結局のところ地震は私にとって「思いもしない」出来事だったのです。てんやわんやしたあの日を振り返りながら、いろんなことに振りまわされ至るところに不満はありましたが、せつかくなので少し元気の出るお話をしてみたいと思います。

気持ちと、こんなもんなんだなあという気持ちでいっぱいになりながら大学に着くと、体育館には学生や地域の方が1,000人近く避難してきていました。それから2週間、避難所運営に関わることになったのです。

日頃からの防災教育で、最近ではあたりまえのように耳にする「共助」の大切さ。しかし、体育館に来た学生と地域の方が日頃から顔見知りであったとは思えませんが、それでも、一緒に逃げてきて、避難生活ができるのです。

ある方は、「どうしていいかわからず家の外に出ていたら、アパートの2階に住んでいる大学生に声をかけてもらい一緒に避難してきた」と言います。「たまには大学に散歩がてら来たいと思います」。避難所を出ていくときに、そう涙を流しながら学生にあいさつして帰られる方もいました。「いつか熊本大学に入って、僕もお兄さんたちみたいになりたい」。そんなお礼状をくれた小学生もいました。「地域に英語を話せる人がこんなにいると思わなかった。もっと仲良くなりしたい」。そう言って笑う、インド人留学生の家族もいました。

避難所生活での数日ですが、その後の関係を良くも悪くも左右する。避難訓練より、避難所運営訓練をするほうが大事だとさえ思うようになっていきます。



4月16日夜の学生による避難所本部。大雨洪水警報が発令されたこの日は、水害に備えて避難口の確認や避難誘導の順番が検討され、持ち場を決めた。運営には、文化祭実行委員会(紫熊祭)、生協組織部、体育会といった団体やサークル、スポーツ福祉学科、看護科の学生などが集まった。



留学生による子ども向けのお絵かき会。画材は教育学部から支援され、国籍に関係なく子どもも親も参加した。子どもたちが描いた絵は、4月30日の避難所閉鎖の日まで施設内に掲示された。

の体育館のように何もなかったところからスタートしても、震災を機に人に優しくするスイッチが入るとのこと。要は、この入りやすくなったスイッチが固くならないような刺激をどう与えるか。それを仕掛けていくのが、私のこれからの役目かもしれません。

今回の避難所運営で、私は特別難しいことをしていません。学生にお願いしたのは、「声かけ」を徹底すること、「居心地の良すぎない」空間をつくること。避難所で元気がよくあいつをされて嫌な気分になる人はいません。救護班の学生には「血圧でも測りましょうか?」とまわって「もらい、環境班の学生には「ゴミはありますか?」とまわって「もらい、2週間も続けていけば、仲良くもなりました。

避難された方は、一日2回しか食事が無いのに、朝から掃除だ配食だとき使われます。それでも、「何か手伝うよ」と毎日お手伝いを申し出てくれるようになったのです。問題は、「やればできるはずなのに、やらなくてもいい環境」をつくってしまふこと、そしてそれをあたりまえだと思ってしまうことではないでしょうか。

机の下も懐中電灯も、そしてこれまでの共助中心の防災教育も、私にとってはどれひとつをとっても、「思っていたのとは違った」ものでした。

それにしても、学生のポテンシャルはすごかった。大阪のみなさん、「今どきの若いやつ」も、案外やるもんですよ。(終)

真田理恵さんに聞く

保健師として熊本地震の避難所へ運営支援に派遣された

避難所を地域に見立て、エリア内の健康課題や人間関係などを把握して、仕事をしていました。

大阪市では、厚労省を通じて、熊本地震の前震が発生した3日後の4月17日には、すでに保健師が派遣されています。以降、順次交代で派遣され、北区役所からは真田理恵さんが5月22日、26日の5日間派遣されました。派遣先は、熊本市西原村の中学校の体育館。そこは、220人が収容されている避難所です。

「第一フェーズではケガ人や病人の手当て、トイレ清掃など、感染症とエコノミークラス症候群の予防が最大のテーマになります。私たちが派遣されたときは、前震発生から1ヶ月以上が経ち、避難所の現場もひと息ついて、日常がはじまっています。避難所から通勤や通学する人が増え、日中に避難所にいる人は20人くらい。大半が高齢者です。エコノミークラス症候群を防ぐために体操をしたり、気持ち解きほぐすために、みんなで楽しく笑ったり、歌ったり、ゲーム体操をしたり。先行きが不透明で鬱になりやすいので、心を動かしてもらおうと努めていました。メンタルケアといっても、仕事はさまざま。避難所から自宅に戻られた方もいらっしゃる。健康相談やメンタルの相談にも乗ります。昼間、ひとりであるときに余震が来たけど、テレビをつけていたせいで、



自宅屋根の瓦が落ちたことに気付かなかったことがトラウマになっている方がいました。以来、昼間、ひとりであるときにはテレビをつけられなくなったり、どんなときでも眠れる方がいれば、ひとりが怖い方もいる。そこはさまざまです。「派遣される前に事前説明会があり、現地に入ってから避難所の家族構成やリーダー格の方、認知症の方やその認知症の方のお世話をしている方など、効率よく細かい情報の引き継ぎがおこなわれるので、派遣されるとすぐに動けます。私たちは、避難所を地域に見立てて、エリア内の健康課題や人間関係などを把握し、業務をおこなっていきます。」

20年前の阪神・淡路大震災以降、保健師派遣のノウハウが全国レベルで蓄積されてきており、こんなふうには、系統立った仕事ができるようになってきているのだそうです。「西原村の避難所はパーテーションをあえて設けていませんでした。避難者同士のトラブルもなく、お互いの顔が見える関係で生活されておられました。管理者の方は、50歳代くらいの男性職員で、ご自身も被災者でしたが、避難所の管理者になり、しっかりとマネジメントされています。それに、被災者の方々の人柄にも救われました。来てくれてありがとう!って言うていただいて。」

今日も、支援の現場では保健師さんが活躍されています。(ルイス)

瀧水将喜さんに聞く

東日本大震災発生から半年後に釜石市に派遣された北区役所職員(当時)

仮設住宅であってもコミュニティは必要。必ず、ルールが必要になる。

「派遣先は釜石市の『地域づくり推進室』。東日本大震災が起こって半年後の9月4日から10月1日まで派遣されていました。自分から手を挙げたんです。あれだけの被害を目の当たりにして、突き動かされるものがあったし、行くなら、ボランティアとしてではなく、行政職員としての責任を伴う『仕事』として行きたいと思っていました。」

派遣先で担う仕事は、仮設住宅地域のつながりの支援と自治会組織をつくる、仮設住宅におけるコミュニティづくりです。当時、瀧水将喜さんは北区役所の「市民協働課」で働いており、まさに区内のコミュニティの調整役を担っていました。その経験を生かすことで被災地の役に立つことができる。そんな行政マンとしての誇りが彼を被災地に向かわせたのかもしれない。もっとも、ゼロから自治会をつくるのは大変だったようです。話を聞いてもらうところからはじめるにしても、大阪から来た行政の人間ということで、構える人もたくさんいたのだとか。

「交流会参加を呼びかけるチラシも、一軒一軒訪問して、話をしながら配っていました。交流会だけだと来てもらえないかもしれないので、支援物資の配布もおこないます。オマケもつけてね(笑)」。



当時、釜石市内に仮設住宅は66ヶ所あり、大きなところでは約200戸、小さなところでは10数戸で形成されていました。瀧水さんは、うち6ヶ所の仮設住宅を担当。「そもそも、自治会を新たに作ることを理解してもらうことが難しい。僕も期間限定の仮設住宅に自治会って必要なのかな?って最初は思っていました。でも、ゴミ出し当番、雪かき、駐車場のスペース、病人が出たら…。ルールをつくらないと、どこかに負担がかかってしまいます。ただし、仮設住宅は未来永劫続くわけではないので、あまり力チツとせず、ゆるやかなものにするのがテーマ。」「リーダー選びも、仮設住宅の方々に任せたら譲り合いになります。そこは一本釣りで、できるだけ自主性にお任せしますが、強引に行くところとお任せするところのバランスが難しかったです。」「いろんな意味において、バランスをとるのが重要だったようです。」

「現地の人たちは必ず復興すると燃えています。被災者ではなく『復興者』だ!ってね。津波や海を怖がっていない子どもたちに救われたし、勇気ももらいました。また来ますと約束もしました。」「そう語る瀧水さんの口調からは、得難い経験が、行政マンとしての彼のキャリアを豊かなものになっていることがうかがえるのでした。(ルイス)」

坂本健一さんの「おじそう讃頌歌」

追悼坂本健一さん

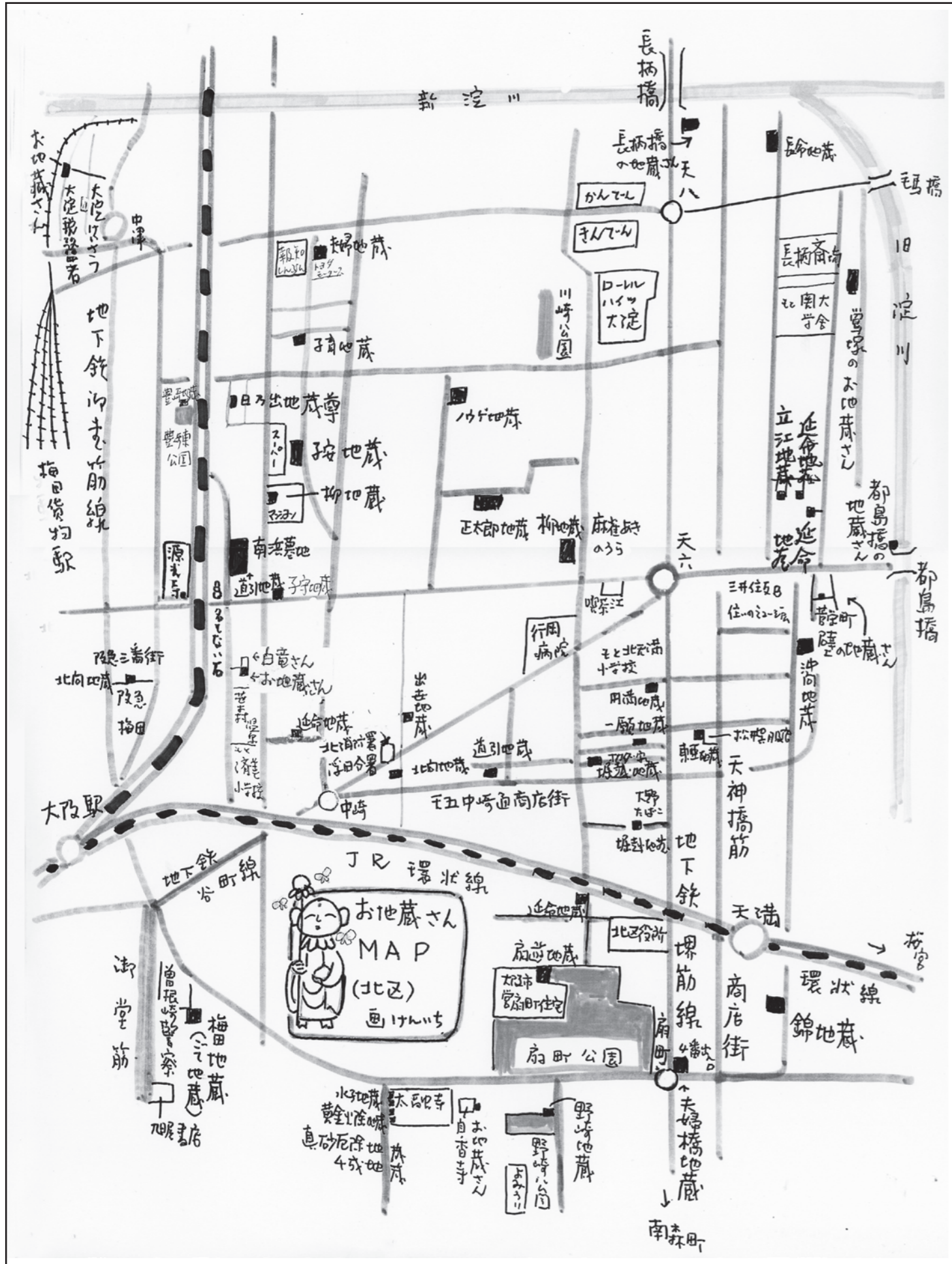
路地（ロージ）の角に居たはった
いつもにこにこしたはった
紅い頭巾とよだれかけ
水雨ふる夜も 暑い日も
ごちやごちやした町
狭い道
汽車の煙りに
噴せもせず
遮断機降りる傍らの
小さな
御堂に坐してます
お線香三本
お婆ちゃん
毎朝六時に
「おはようさん
今日も 元気を 頂戴ね」
「よし 任せとけ
大丈夫」
そんなこと云わんけど
赤頭巾
長屋を護って 百を越す
七月十五は盂蘭盆会
施餓鬼する日や
路地の塀に
灯を点し 提灯釣って
画を書いて

虹みたい
近所のお婆さん
井戸のそば
おにぎりつくって
あんこ巻き
集う やんちゃに
手づかみで
おいしいやでと
配ります
三日間ですけど
お地藏さん
あんたが 長屋の主役です
共同便所 井戸のはた
笑いうずまく 幸せは
小さくても 暖かい
照る日 曇る日あったけど
泣く事多い毎日を
辛抱しいやと
肩抱いて はげましくれる
仏さん
あんたの白毫 光ってる
夫婦喧嘩したあとで
嫁はんそつと手を合す
そのあと 亭主も
「ごめんやで
見たはりましたか」と
照れて来る
鯛焼く煙に くすぐられ
夏には 西瓜が供えられ

住む人みんなの 入口で
火事など出すなど
見張ってる
時には怖い お地藏さん
夕焼け空が 後光です
ビルとビルの谷間から
朝は太陽まん前に
すつくと立った
よだれかけ
赤いマフラー
お洒落です
いつか添う日が
あるように
会社帰りに手を合わす
若ものたちに
目を細め
良えようになる
近いうち
云うて下さるお地藏さん
あんたの路地で育った子
学校ゆく道 帰る道
ちよこんと
頭下げた子
その子が こんなに
成長し 頼んでくること
変って来た
「まかしといて」と
云わんけど
云うてくれそな
お地藏さん

めをと地藏（金時食品の前）
戦災で焼けましたんや。それで修復
してまんねんけど、うまいこといつ
てまへん。最初近所の偉い人が建て
はったよつて地廻り地藏云いました
けど、二体仲よくならんではるよつ
ていつのまにかめとお地藏さん云う
ようになりましたんや。おさい銭結
構だつせ。おさい銭もお供えもみん
なじき誰か持つて行き居りまんねん。
「そりやええこつてす。この
お地藏さん生きたはります。困った
人貧しい人を救うためにお地藏さん
はここにいたはりますのや。（天六の
ねこ）
おおきに ええこときかしてもらい
ました。（自動車修理工場の御夫婦と
の会話）
大野酒店のお地藏さん（浪花町）
まっ黒でつしやる。平成2年長屋が
焼けたとき一番に火が入りました
暑いことでしたやるなあ。昔は子供
が一ぱいよつて地藏盆に踊ったもん
ですのに。大野家の家敷の中の井戸
の中から出はりました。もうかれこ
れ百年は立ちまっしやる。
南浜墓地の北側路地
ええもう何年になりますやるか。わ
てがここに嫁にきたときもういたは
りましたさかい、南浜のお墓地の北
の入口でつさかい。まあ、わてら北
向地藏はん云うてまんのや。お背丈
つか。メジャーもつてきます。
ちよつと耳は遠いが優しく親切なお
ばさんでした。
大淀税務署の西裏はJR貨物線が走っ
ている、その木柵の前に地藏堂があ
る。拝しておさい銭を投じた。チャ

リンとかすかな音をして地下に吸い
こまれた。ふり返ると一人のホーム
レスが訪れているのを見た。「しまつ
たなあ。お饅頭か果物を供えてあげ
たらよかつたなあ」と胸がチクツと
した（天六のネコ）
助産婦さんがいた。石川さんと云つ
た。優しく信仰心の厚い方であつた。
彼女の敷地の中に、江戸時代と伝え
られる数基の無縁さんがあり、石川
さんはお供養を欠かしたことがな
かつた。突然地上げ屋が現われ、激
しく立退きを迫った。石川さんはこ
こにお地藏さまを建立し、無縁さん
を葬むることを条件に立退いた。や
がて年移り、石川さんは亡くなった。
然し地元の人々は建立されたお地藏
さんを親しみをこめて厚く信仰した。
8月24日地藏盆の宵、楽しく輪に
なつて踊る地元の人々の姿があつた。
路地がある。石段がある。戦前この
路地を横切つて（淀川）中津川へ通
じる小さな川（井路川）が流れてい
た名残りである。
その段差を南に進み、西に折れ曲る
と、長屋の家並みの中に抱かれるよ
うに、北向き正太郎坊地藏尊が坐ま
す。
80年ほど昔、この辺りに住む折禱師
が突然云いだした。このお地藏さん
は靈験あらたかな佛さんで、この長
屋を火事の類焼から防ぎ、赤ちゃん
はみんな障害を持たないで健やかに
出生する。したがってこのお地藏さ
ん正太郎坊は正と云う位がある。
長屋の人々はこれを信じ、今も深く
崇拜しながらも頼りにしているの
である。



今年の7月5日、北区の宝もどった名物古書店「青空書房」店主の坂本健一さんが、心筋梗塞のため逝去されました。享年93歳。戦争から復員された1946年（昭和21年）、大阪の闇市で本を並べ、翌年からは北区でお店を構えられます。以後、田辺聖子さんや山本一力さん、筒井康隆さんらと親交を深め、休業日に店のシャッターに貼られる自作のポスターは、坂本さんのほっこりとした絵とともに添えられた至言の数々が話題となつて、全国からファンが訪れるようになりました。坂本さんに読書の喜びを教えられた人は、数知れませんが、つひまぶでは、坂本さん自作の「お地蔵さん map」を託されていました。掲載する機会は、今しかありません。これを埋もれさせないためにも、追悼の念とともに、ここに掲載します。（ルイス）

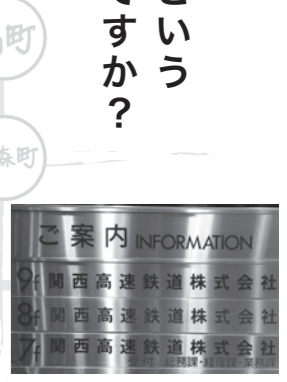
駅探

えきたん
大阪天満宮
Osakatenmangu

関西高速鉄道という会社をご存じですか？

大阪天満宮の最寄り駅としてだけでなく、地下鉄谷町線・堺筋線の乗換駅として多くの人に利用されているJR東西線の「大阪天満宮駅」。天満天神繁昌亭へ向かうときに利用する階段横のエレベーターに乗ると、「関西高速鉄道株式会社」という聞き覚えのない社名プレートが目に入ります。なんじやらほい？と思って調べてみると、JR東西線（京橋〜尼崎間の全長約12.5km）を建設し保有する会社であることがわかりました。なんと、JR東西線はJRの持ちものではないようなのです。なぜこのような運用形態なのでしょう？ 関西高速鉄道の広報の方にお話を聞いてきました。

そもそも、JR東西線建設の計画は、高度経済成長期の昭和40年代後半に策定された「片福連絡線計画」に端を発します。当時、都市周辺部の人口増加により大阪市内の鉄道輸送は国鉄・私鉄とも飽和状態。なかでも、片町線は乗車率が250%を超えるひどい状態でした。尼崎から宝塚・三田方面へ走る福知山線は周辺に住宅地が増える一方であるにもかかわらず、単線で、ディーゼルカーが走っていて、列車の本数を増やしたくても増やせる状態ではありませんでした。このままでは鉄道輸送は近い将来必ずパンクする。そこで当時の国鉄は、京橋（片町）と尼崎に連絡線を建設し、大阪駅周辺や中之島にあるオフィス街への輸送力を分散させる、片福連絡線計画を立案します。ただ、1981年（昭和56年）4月に国の認可を得ましたが、このときには本格的な着工には至らなかったそうです。その後、1987年（昭和62年）に国鉄は分



割民営化され、この計画は西日本旅客鉄道株式会社（以下JR西日本）に継承され、関係者の努力によって事業実施のめどが立ちほじめつ。そしてついに、1988年（昭和63年）5月、片福連絡線を建設するために大阪府、大阪市、兵庫県、尼崎市の各自治体とJR西日本をはじめとする民間企業の出資により「関西高速鉄道株式会社」が設立されるのです。

これにより、JR西日本は第二種鉄道事業者として車両を走らせて運営、関西高速鉄道株式会社は第三種鉄道事業者として片福連絡線を建設・保有する上下分離方式が実現し、長期借入の資金を導入することにより、念願の建設工事が動きはじめます。工事は、既存の鉄道と10ヶ所で交差、さらには淀川や大川の下をくぐらせるなど、未体験の深度で掘り進める難工事でしたが、その努力は、1996（平成8）年度土木会技術賞受賞というかたちで高く評価されました。こうして、片福連絡線は1997年（平成9年）3月8日に「JR東西線」として開業。都市部と郊外間の輸送力を増大させ、関西圏の発展に大きく寄与する路線となりました。また、上下分離方式は土地の値段が高い都市部での鉄道路線新設のモデルのひとつとなり、その後、大阪では、西大阪高速鉄道の阪神なんば線（阪神西九条駅〜近鉄大阪難波駅）、中之島高速鉄道の京阪中之島線（京阪天満橋駅から京阪中之島駅）、建設中の大阪外環状鉄道のJRおおさか東線（新大阪駅〜久宝寺駅）などの路線で、上下分離方式が採用されています。（平井裕二）



天満の子守歌碑

大川に沿う、南天満公園。ぼつぼつと建つ碑のひとつに、天満の子守歌の碑があります。

「天満の子守歌
ねんねころいち 天満の市よ
大根揃へて舟に積む
舟に積んだら どこまでいきやる
木津や難波の橋の下
橋の下には かもめがいやる
かもめ取りたや 竹ほしや
大阪天満宮宮司 寺井種茂書」と歌詞が刻まれています。

天満の子守歌は、江戸時代に天満にあった青物市場にまつわる歌です。江戸時代初期に設立された天満青物市場は、大阪唯一の官許の市場として1931年（昭和6年）に大阪市中央卸売市場が開設されるまでのあいだ、大いに栄えました。この歌は、木津や難波の人たちが天満以外にも青物市場を立てようと活動するなかでつくられたと言われています。とはいえ、今でも青物市場といえば天満が連想され、この歌にあるように「天満の市」と呼ばれ親しまれてきました。往時の面影を残すように、天満の子守歌の碑は建てられています。歌碑の横に立つ女の子の像。その肩越しには幼子が前を見ようと首を伸ばしています。女の子は右手から来る誰かにあざつしようとして見ているかのように見えます。いかめしい偉人の像とは違う、心安い姿をしています。昔の小学校にあった、薪を背負って、本を読みながら歩く二宮金次郎像を連想させます。二



宮金次郎像と違うのは、名もない女の子の像だということ。

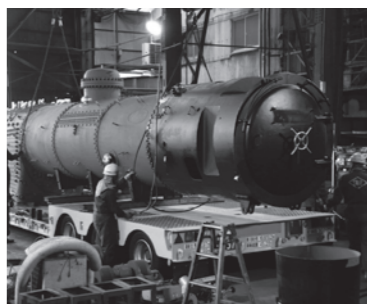
この像は、1983年（昭和58年）4月、天満ライオンズクラブの認証20周年記念として建てられました。その記録が大阪天満宮の『昭和五十八年社務日誌』（大阪天満宮文化研究所蔵）4月23日のページに残されています。「大阪天満ライオンズクラブが認証二十周年の記念に天満の子守歌を碑にして残すこととなり除幕式行われ、黒みかげの台座（縦一・二メートル横二・二メートル）に刻まれた歌詞のそばに子守りのブロンズ像（高さ約一・七メートル）が南天満公園に完成、歌詞は同ライオンズの会員でもある宮司が筆を執り、像は富山県彫刻家連盟会員の砂原放光氏が制作」とあります。天満ライオンズクラブでは、今でも毎年11月にこの像を掃除されており、いつまでも大切にされている像なのです。

ところで、この像を製作したとされる砂原氏は、ほかにも、広島県の被曝動員学徒慰霊慈母観音像や佐賀の田中正造像、三重の沢村栄治像など、日本各地にさまざまな像をつくっています。昭和40年代から50年代にかけて活躍された方のように、残念ながら砂原氏に関する記録はほとんど残っていません。像の裏に、強い筆致で名前が刻まれているばかりです。（棚橋真理）

モノづくり 最新線

北区 第七回目 中津から、下町ロケットならぬ下町蒸気機関車！ 株式会社サツパボイラ

観光資源などで脚光を浴びている蒸気機関車ですが、その蒸気機関車の心臓部ともいえるボイラー部分の復元や定期全般検査が、中津でおこなわれていることをご存じですか？ 今回は中津3丁目にある（株）サツパボイラ代表取締役・颯波（さつぱ）郁子さんにお話をうかがいました。



JR西日本の依頼で大規模修繕をおこなったD51200号機のボイラー一部分。蒸気機関車の顔の部分が見てとれます。

サツパボイラは、創業から現在と同じ場所に工場があり、炉筒煙管式ボイラーやごみ焼却装置などを製造するメーカーです。約30年前、JR東日本から蒸気機関車のボイラー復元依頼が何社にも出されたそうで、旧国鉄時代からボイラーなどの納入指定業者であったサツパボイラにも打診がありました。ボイラー復元には特殊な技術が求められるため、サツパボイラ以外の会社は依頼を断ったのだそうです。当時も大型ボイラーの保守や修理において、技術力や品質ではトップクラスの実力であったサツパボイラですが、蒸気機関車のボイラー復元を引き受けるのは、簡単な決断ではなかったと言います。もちろん、なにかも初めての経験であり、とりあえずは、すべてを確認しながら進めていたのだとか。しかし、「こういう経験は勉強になるから」と法令関連で相談していた労働局の進言もあり、その後、続く蒸気機関車のボイラー復元を本格的に請けることにしたのです。復元していくなかで、劣化などで使えなくなった部品が出てきた場合、実物を採寸して型を取ったりして、新たにつくるしか方法がありません。モノを復元させるということは、当時の部品

株式会社サツパボイラ 所在地●大阪市北区中津3-25-16 創業●1918年（大正7年）HP●http://www.sappaboiler.co.jp 事業内容●各種ボイラー設計、製造、据付。ごみ焼却装置の設計、製造、据付。蒸気機関車のボイラー復元、修繕工事など。

北区 考現学

デジタル化する 駅周辺の案内図



人々の移動の拠点となる駅の改札口付近には、必ずと言っていいほど周辺の案内図が掲示されているのをご存じでしょうか？ JR大阪駅の御堂筋口に、タッチパネル式のデジタル案内板が登場したのは、去年の6月。しかも4Kと言われる高解像度の画面が導入されたのは、これが全国初でした。今では、JR天満駅にも同じものが設置されています。スマホのように指で画面に触れてみると、地図の拡大・縮小も自由。電車の時刻表、駅構内図、路線図、列車運行情報に画面を切り替えることもできます。インバンド対応のために、言語（日本語、英語、中国語、ハンガール）が選択できるのも、デジタル地図ならではの私たちにとても、見慣れた梅田の地図を別の言語で見られるのは、なんだか新鮮です。

また、そこに表示される地図には、2種類のものがあります。ひとつは、ズームアウトしていけば、日本地図まで表示できる広域図。もうひとつは、表示範囲が限定された駅周辺の詳細図。前者は、通常の地図と同様に、北の方角が上になっているのですが、後者は、そうではありません。その地図に面する人の身体の向きに合わせて、地図の向きが定められているのです。たとえば、利用者にとつ

て西に向かって案内板が設置されていれば、地図も西が上になっています。こうした配慮によって、利用者は自分で地図をまわしたりしなくても、いま自分がどの方向を向いているのかの方向に歩いていけばいいかをひと目で把握できます。ただし、これは、今にはじまったことではありません。じつはデジタル化以前から、駅周辺の案内図は、必ずしも北が上になっていないわけはありませんでした。駅には、その土地に初めて降り立つ人も多く、方向感覚すらつかめないなかで頼られるのが、このような案内図。そこで、あらかじめ地図をまわして示してあげること、人々が自ら地図と身体との向きを一致させる苦勞を解消しているのです。実際に観察してみると、外国人観光客を中心に、そんな案内図に目を凝らしている人は少なくありません。デジタル化が進んでも、駅で方向音痴に陥りがちな人々を手助けする案内図の役割は、今も昔も変わらないのです。なお、今年3月には、阪急梅田駅周辺にも、「Umedia」と呼ばれるタッチパネル式のデジタル案内板が設置されました。これには、梅田にあるオフィス・商業施設・ホテルなどの計79施設が登録され、施設を選択すると現在地から目的地までの経路、距離、所要時間が表示されるナビゲーション機能まで搭載されています。そして、やはりこれも設置箇所によって地図の向きが異なります。さて、これは全部で4ヶ所に設置されているのですが、どこにあるでしょうか？ ぜひ探してみてください。（松岡慧祐）



聞き手・書き手／棚橋真理 撮影／浅香保リス龍太

人の世話ばかりしてきた人生。
きょうだい、子ども、両親…。
今では地域のお世話も
しています。
でも、苦しいと思ったことは
ないですね。

「このまま、家族の世話をしていこう」と思っていた頃、結婚の話が持ち上がります。お相手はお父さんの仕事の知り合いの次男さん。仕事のことでお父さんを訪ねてくることがあり、何度か会ったことのある人でした。先方から「いい娘さんがいる。ぜひに」と結婚話を持ち上がったのです。正式なお見合いをし、半年のお付き合いの末、結婚します。「きょうだいの世話もあるし、私じゃなくて、妹から」と思っていたイツ子さん。「でもね、父が、結婚は上から順番にしないといけないって言うんです。下のきょうだいの世話は順番にしていけばいいって。でないと将来、ひとりになってしまっって心配したんですね」。お父さんの強いすすめがありました。

女性会との出会い

結婚して、子育てをし、お子さんが小学生と中学生の頃には、それぞれのPTAの役員を務めました。その役目を終えた頃、地域の防犯の役がまわってきます。お義父さんのすすめもあり、やってみることに。これが、イツ子さんの地域活動のはじまりです。生活にも少し余裕ができて、ダンスを習いはじめた矢先のことでした。ほどなくして、防犯の活動を通じて女性会に出会います。防犯協会の総会で、いろいろな団体の、それも男性ばかりの会長が居並ぶなか、ひとりだけ女性の方がいました。それが女性会の会長でした。「かっこええなあ」。

ええなあと思いましたが。男性に混じって一緒に活動し、活躍する姿に強く惹かれました。それまで女性会にはお義母さんが活動されていたため、イツ子さんがそこで活動をするにはありませんでした。ところが、その女性会に、なんと副会長として迎えられます。それだけでも驚きですが、さらにその2年後、会長に就任します。幼い頃から培ってきた、どんな人が相手でも動じずに堂々と応じる力と、持ち前の行動力を求められてのことでした。

「あるとき、歴代の女性会の会長がうちに来られました。会長就任の要請のことで、夫に説明に来られたんですね。夫は、私が高長になったら、口が立つから大変なことになりますよと断ろうとしたんですけど、その口を買いに来ましたって逆に説得されちゃったんです」。

そんな経緯もあってか、以後、ご主人は、地域のことはイツ子さんに、ご自身は家業に専念することを決め、イツ子さんの活動に口を挟むことは一切なかったそうです。

「あんだ、行つていいよ！と言ってくれました。地域のことをする人は一家にひとりではないと思っていたんでしょね。でないと、大変なことになるって」。

それまで、女性会の会長は2年交代でどんな入れ替わっていたそうです。地域のことは男性が中心で、その輪のなかに女性が混じっていくのは本当に大変なことでした。また、地域の活動をする、ご自身だけでなく家族にも影響する、とよく言われます。出かけることが多くなり、見えないところでもお金がかかります。会長ともなればなおさらです。それでも、ご主人からなにか言われることはありませんでした。むしろ「お金をちゃんと持っていきなさい」と気づかなくてもいい、送り出してくれたそうです。地域の活動をしていくうえで、ご主人の理解があったことはとても大きかったと話されます。

ある土曜日の正午。
済美福祉センターでは済美女性会による食事サービスがおこなわれ、大勢の人でぎわっていました。

メインは煮込みハンバーグ。副業にニンジンとプロッコリー、こんやくの炊いたん。ごはんはカボチャのポタージュスープ。お漬物とデザート、食後のコーヒーマドでついでです。やさしい味付け。どれも丁寧につくられた、家庭の味です。毎回、80人も人が参加しています。その、にぎわうテーブルのあいだを、配膳やごはんのおかわりを聞きながら、ひとりひとり声をかけてまわるイツ子さんの姿がありました。

済美女性会相談役の栗澤イツ子さん。この3月で引退されるまでの30年間、済美女性会の会長を務められてきました。後半の12年間は北区地域女性団体協議会の会長も兼任。そのほかにも、大阪市女性会副会長を4年、民生委員、人権擁護委員、北区選挙管理委員会の職務代理者など、務めた役職は数知れません。済美を中心に北区のさまざまな活動にかかわってこられたイツ子さんに、そのバイタリティーの源はどこにあるのか、お話をうかがってきました。

奔走するお姉ちゃん

昭和7年（1932年）8月生まれ。5人きょうだいの一番上でした。そのため、早くに亡くなったお母さんに代わって、下のきょうだいを育てました。お母さんが亡くなったとき、きょうだいの下のふたりはお母さんの顔も覚えていないくらい小さかったそうで「お姉ちゃん、お姉ちゃん」と甘えられていたのだとか。学校に行こうにも、「お姉ちゃん、お姉ちゃん、お腹空いたって言われたら、ほっておけないでしょう」。

子育てしやすいまちへ

それからは、「私は、突っ込んでいくタイプだから」という言葉のとおり、女性会を中心にさまざまな地域の活動にまい進します。そのスタンスは、「上の人にはいくらでも言いますよ。下の人たちは守らないといけないですから」という言葉に集約されます。上の人は、社会的な地位の高い人だったり、別の会の会長であったり、時と場合によってさまざまです。相手と上下関係になるのではなく、対等に。そして、自分についてきてくれる人たちを守る。それがイツ子さんのやりかたです。そうして、対外的な活動もしながら、女性会での活動も充実させていきました。

イツ子さんが立ち上げた女性会の活動のひとつに、「さくらんぼの会」があります。さくらんぼの会は、北区で最初にできた子育てサロンです。スタートした頃に通っていた子どもは、今では中学1年生になりました。もう10年以上続いている活動です。

「子育てに悩んでいる人、夫からの暴力に悩んでいる人、離婚を考えている人、いろんな人がいます。いろんな悩みがあります。以前に相談に来ていた人が、済美を離れて何年か経ってからは、もう大丈夫になりました」と元気な顔を見せてくれたときは、涙が出ました。うれしかったですね」。

「済美は、子育てしやすいまち。それはどこにも負けませんよ」と熱を込めて話されます。さくらんぼの会では、子どもを連れてきていた人が、その後は、サポートする側で来てくれるようになったり、手伝いを申し出てくれるようになるそうです。子育ての先輩から後輩へ、お母さん同士のお付き合いが無理なくはじめられます。そういつた、誰でも気軽に参加できたり、手を挙げられる雰囲気と環境になるよう、イツ子さんは気を配っています。

「自分がね、来るときだけ来てみる。そんなところからはじめたらいいんですよ」と

代のことです。
13歳で終戦を迎えたときは「日本、負けたんやて。情けないなあ」くらいにしか思わなかったそう。

それでも「戦争はダメ。食べるものも、なんにもない」と話されます。「疎開こそしなかったけれど、親戚の田舎の家に、きょうだいみんなで預けられました。だから田舎の仕事はなんでも手伝いましたよ。田植えから稲刈りまで、なんでもしました」。

闇市にも行きました。「食べるものは、配給しかないんです。それもキューバ糖でね。これを闇市に持って行って、お米に変えるんです」。

最初はお母さんにくっついて行っていた闇市でしたが、お母さんが亡くなって以降は、ひとりで行くようになります。「女学校の制服で行っていました。きょうだいを食べさせないといけないから、必死でした。おっちゃん、もうちよつと、もうちよつとちよつとちよつと、大の男の人相手にね。たんか切って、対等に交渉していたもんです」。どんな役職の人にも、臆せず、動じずに応じることができるとは、このときの経験からだと言われます。

「戦争で、母を亡くしました。戦争が、私をこんなふうにするくしました。あのとこのことを思えば、その後のことなんて、なんてことないですよ」。

「うどん屋が開くと聞けば、うどん屋に行つて並んでね。あの頃はよく並びました。それが仕事だったから。うどんがもらえなかつたら、食べるものがないんです。「いつ空襲が来るかわからないから、寝るときも服のまんまでね。家の床下に防空壕がありました。きょうだいで手をつないで入りましたよ」。

自分のことを考える余裕がなく、誰もが楽しく甘酸っぱい時間を過ごすはずの青春時代を、戦中戦後の苦しい時代を、お姉ちゃんは、家族のために奔走していたのです。

話されます。間口を広くし、どんな人も受け入れながら、世代を区切らず、地域の女性同士のつながりを、輪をひろげていこうとされています。

済美福祉センターに、イツ子さんの思いがこもった場所があります。キッチンです。済美福祉センターのキッチンは、飲食店顔負けの設備が整えられています。食事サービスやふれあい喫茶以外にも、イベントの多い済美地域では大人数で飲食を楽しむ機会がたくさんあります。その舞台裏が給湯室程度の設備では対応しきれない、衛生面を考えたもしっかりとした設備が必要だと、誰よりも熱意を持って提案されたのは、イツ子さんでした。

それもこれもみんな、済美地域の将来を考えてのこと。イツ子さんは人を育て、世話をし、活動を通じて地域を育てています。誰かが失敗をすればかばい、誤った方向に進もうとすれば引き戻してくれます。見守ってくれて、危なくなれば助けてくれる、イツ子さんはまさにお姉ちゃん。人に任せ、見守ることができる度量。その忍耐力と根拠を思ふと、気が遠くなります。役職がイツ子さんをつくつたのでなく、イツ子さんだから役がついてきたんだと感じずにはられません。また、30年間も地域で活動してこれたのは、「主人のおかげです」とも。相談役となった今、会長時代とは違った立場で地域を見守っています。「これまで、ずっと人の世話をしています。きょうだいの世話をし、子どもの世話をし、義父と義母の世話を最後までして、見送って。それだけじゃなく、今では地域のお世話もしてね。でもそれで苦しいと思つたことはありません。ちつとも苦ではありませんね。お世話されるほうにまわるのはイヤ。お世話しているほうが、ずっといい」。

最後に、これからやりたいことをうかがうと、みんなで見に行きましよう！。

みなさん、ご準備を！（終）